

本番2回のみ契約で全稽古に出ていた南アフリカ出身のトーマス・エルラングが急遽代役を果たし、好評を得ていた。

所見した11月2日は、もともと彼の歌う日だったが、舞台上を旅し、大半はオーケストラ・ピットの中で歌うエルラングは、頼もしい声量と安定感のある歌唱技術で、外見は立派過ぎるものの、作詞のヴィルヘルム・ミュラーやシューベルトを体現していた。現代音楽のスペシャリスト、エミリオ・ボマリコの指揮も統率力があり、暗い心の底を描き出すバレエ団の身体的表現と合わさって、冬の厳しさを思わせた。

前半は楽しめたが、そのうち孤独が重く心にのしかかり、24曲が終わる前に心底疲れてしまった。そして最後に思ったのは、「ああ、シューベルトの《冬の旅》が聴きたい」ということだ。ここまで孤独の痛みを伝えられる上演は成功したのか、やはりオリジナルの歌曲集には叶わなかったのか、それすらも解らないまま、痛い心を抱えて帰路についた。(中 東生)



ユニークな試み、バレエ付きの《冬の旅》はなにほともあれ、強烈な印象を残したようだ ©Gregory Batardon

Concert バレエ付きでテノールとオーケストラが《冬の旅》

ドイツ歌曲集の頂点に君臨するシューベルト《冬の旅》を、ドイツ人作曲家ハンス・ツェンダーがテノールとオーケストラのために編曲し、1993年、フランクフルトで世界初演したが、それにチューリヒ歌劇場のクリスティアン・シュブツク監督率いるバレエ団が視覚的表現も加え、総合芸術として生まれ変わった。

スイスが誇るテノール、マウロ・ペーターが予定されていたが、初日は病欠し、